

農村開発実践のエスノグラフィー ～アクターとしてのわたしたち～

日本福祉大学大学院非常勤講師 小國 和子

《要 旨》

本報告では、農村社会生活を包括的かつ長期的に見守ろうとする人類学的フィールドワークの視点と姿勢で行う開発援助研究とその生産物としてのエスノグラフィーが、現代の農村開発援助実践が抱える課題に対してどのような意義を持つのかを検討する。

農業・農村開発援助では、農民の主体的な参加を求め、持続的発展を目指すアプローチが主流となっている。マルチセクターアプローチでは直接的な農業指導に加え、副業生産、保健医療教育など非農業分野への取り組みが行われている。しかし事業活動が「足し算」されるだけでは、包括的な農村社会への理解に基づいているとはいえない。現在の開発援助では、概況調査やベースライン調査といったかたちで実情把握が行われているが、そこでは農村を「問題状況の現場」として見る視点が前提となってしまう。

自然資源に依存し、必然的に相互作用的な集団管理の必要性を生じさせる農業のあり方には、直接的な農作業を超えて、広く社会関係や生活様式全般にわたる地域特徴が体现されている。対象社会への深い理解を第一義的な目的として包括的な社会生活に関心をよせ、農業を取り巻く人々の関係と今後への変化傾向を読み解くことは、社会関係の全般的な特徴を把握し、社会全体の変容を検討する端緒となる。しかしながら、農村社会を対象とするすべてのエスノグラフィーが、農村開発を考える上で有効な示唆を与えるかといえそうともいえない。農村開発の現実的な問題と実践について論じ、検討し、開発援助介入への政策提言としての意義を目指すのであれば、ただ漠然と農村社会の生活に身をおいて生活に溶け込み、記録することで終わるわけにはいかない。

伝統と近代化に象徴されるような開発をめぐる鍵概念を切り口としてみていくことで、農村社会における包括的な生活と多様な農業の現状が果たしていかなる変化の途上にあるのかを読み取る視点が養われていく。さらに農村社会が抱える問題に直面したときにフィールドワーカーである自分はどう「かかわる」のか、という自らの姿勢が試される。特に、問題として意識されていない構造的なゆがみや抑圧に調査者が気づいたときにどう行動するのか。これが、開発実践のエスノグラフィーに向かうフィールドワークの視点と、そこで必然的に逃れられない社会的な責任の発生である。開発実践のエスノグラフィーは、視点と目的の異なるアクター間で、共通項としての農村開発概念とともに検討しながら実践していくための媒体となることが期待される。